

32 愛憎果てなく

栄華の頂上を極めた藤原道長の最後は、親しい一族が枕辺まくらべにずらり並び、阿弥陀仏の掛け軸に結んだ紐いもを握にぎっての旅立ちでした。

あの世への旅立ちはだれでも独りです。しかし、その間際、住みなれた家で、愛する身内のお見送りのあるなしは、死ぬ者にとってそれこそが重大事です。前にふれましたが、任運荘の高齢者が死に場所の希望に答えて、家で一三六%、任運荘で一六二%、任運荘で死にたいが過半数でした。普通、例えば医師・柏木哲夫氏の調査では、家で一七二・四%、病院で一三%、私たちの調

査とは大きな差です。ついでに現実には五二・七％が病院で死んでいます。

その意味で、老人ホームは限りなく家に近づかねば、高齢者の願いとは遠く隔たっていることとなります。

しかし、老人ホームの中の死ほど寂しく悲しいものが、ほかにあるでしょうか。死を前にする時、ひとは幼児のごとく心身きりなく甘えを求めてやみません。さすつてくれ、抱いてくれ、手枕を、お話を……と。それは家においてのとて、ホームという旅にすれば、自分にすっかりあきらめさせています。

あきらめているからとて、希求は消えません。幼児なら泣いて訴えますが、高齢者はそれができません。しかし、音がします。夜のしじまの中に力なきセキ、抑えたうめき、時に悲しい寝言、転々とする身じろぎに、その声が聞こえます。高齢者は近づく死の中で、息をひそめて耐えているのです。

ある年の暮れ、粉雪舞う夜、「看護婦さん！」と、悲しくOさんが呼んでいます。「さみしか、手を握ってつかわさい。どっこも行かんで、ここにいておくれ」。こらえられずに、こうして訴えられる人はいい方です。「いま、じい

さんの夢を見た」。涙ぐんでいます。

人目には色狂いとしかうつらないほど、じいさんを求めて荒れ続け、すでに死んでいるのに信じられず、「ほかの女がとった」のだと、寮母までもが敵で「いんばい女ご！」とどなる六年間です。

このごろは、ずっと落ち着きだし、寮母を求めるナースコールも頻繁です。そうなると応える寮母も自然と、いっそう心を添えます。背をさすられながら彼女はいつの間にか語りはじめています。

「そうそう、私の村ではな、お正月に今年も幸福であるようにと、紙で作った人形を川に流す習慣があったとばい。こまかった私もおぼつかない手で、一つでも多く幸せになりたい、とせせせと作ったとよ。なつかしかね。いつの間にか、こう年をとり、そげんこと忘れちゃったとよ。悲しかネー……」。

隣に面会人があると、布団を頭からかぶり、物を投げつける荒れようだったのに、それもやみ、おむつを替える寮母に「すみませんナ。悪口言うて、許してつかわさい」。

あと三カ月で九十歳という春、潮のひくように静かに昇天。七年間、胸に抱き続けたじいさんと一緒の旅立ちだったに違いありません。

気位高いTさん（九十一歳）は返事のない娘にあてて手紙を書いて、との要求が急に増えてきました。手形をとってあげると、その一本々に「あいたい」と書きつけ、「これで、すっとした」と。

城下町の旧家、子供を残して家出、艶間^{えんげん}多いはなやいだTさんでしたが、いま急に「こわい、ひとりでいるのがこわい」と訴え始めたのです。「何もないが、娘が来たらこれを」と、便を包んで引き出しにしまいます。

こちらの強い要請で、娘もついに来るとの返事。「九十一までひとりで頑張ったから子供たちも許してくれたでしょう」と安堵。しかし、娘が着いた時はすでに臨終間際、意外にも、娘は母をにらみ下ろし、震えながらのしり出しました。

「あなたは男と駆け落ちした。捨てられた私たちは人からさげすまれ、空腹のまま、さ迷い歩いた。兄は母はないものと思え、と言った。だから、今度も兄

は来なかった……。私たちは、あわててとめたので、しばらく沈黙。何を思ったのか突然、「お母さん！」と娘の涙の一声。すると、こわばっていた母のほおが和らいでいくではありませんか。人間の聴覚は他の感覚と違って死ぬ間際まで生きているのです。

そのまま旅立ちでした。いまわのきわに、やっと愛と許しを感じたからでしょう。

ひとは死出の旅路のぎりぎりまで、げにも、愛憎果てない存在のようにも思えてなりません。